

特集

小児の被曝線量低減の試み

Radiation Exposure Reduction in Pediatric Radiology

特集を企画するにあたって

甲田 英一

慶應義塾大学医学部 放射線科学教室

Ehiichi Kohda

Department of Radiology, Keio University

今回から本誌に各編集委員の責任で特集を組むこととなりました。記念すべき第一回の特集を組むにあたって、種々の案が浮かびましたが、我々の大きな責務のひとつである小児X線検査の被曝線量低減をテーマに選びました。

患児の被曝線量を低減するためには、1) 日本における小児放射線被曝の現状、2) 小児における放射線被曝線量とその障害の関係、を認識していることが前提となります。これらについては、第一回目の特集は学会会長、学会理事長のお二方だけで執筆していただきたいとの思惑で、割愛させていただきました。詳細は藤岡理事長が作製されました本学会のホームページ、radiology.dokkyomed.ac.jp/jspr/home.htmlを参照してください。

実際にX線検査による患児の被曝線量を軽減させるためには、西山会長が特集内で述べられていますように、X線検査が行われることの正当性と、経済的および社会的に見て達成できる最大限の被曝線量低減法（放射線防護の最適化）、の二つの面を検討する必要があります。

前者については各施設の装置、医師の能力によって異なる点、疾患によって未だ統一見解が出ていない部分があります。これらについてはこの特集を契機に、今後とも議論を進めたいと考えています。後者については他の国と比べて経済的および社会的制限が少ない日本にあっては、議論の余地は少なく、日本中で行われている財政上の無駄を無くすこと、小児医療に対する官僚の無知を知らしめることで実行可能、克服されるべきことと思います。

本学会の目的は会則にあるように小児の健康増進にあります。これを推進するにあたっては、とかく診断や治療手技に関する知識に意識が向かいがちですが、会員個々が患児の被曝線量を日常診療の中で低減する努力も必要です。確率的な障害は個人の経験の中では頻度が薄まってしまい、実感がたいものですが、その危険性を認識することで、明らかに低下させることが可能です。今回の特集で記載されていることで、会員諸兄姉の施設で行われていないことがありましたら、ぜひ取り入れて下さい。